

令和6年度 第1回 宇美町総合教育会議 議事録（要旨）

日 時	令和6年8月19日（月） 15時 ～ 16時		
場 所	宇美町役場1階 多目的ホール		
委 員	安川 茂伸 町長 折居 邦成 教育長 田島 章江 教育長職務代理者 金子 辰美 教育委員 吉村 順子 教育委員 橋本 愛子 教育委員（欠席） 原田 和幸 副町長		
説明者	教育委員会事務局 学校教育課 川畑 廣典 課長 同 牧草 哲也 指導主事 同 日高 祥一郎 課長補佐 同 平松 利明 課長補佐 社会教育課 竹下 健一 課長 同 藤崎 賢 課長補佐 こどもみらい課 入江 和美 課長 同 辻 奈央 課長補佐 事務局 総務課 八島 勝行 課長 同 村上 浩一 課長補佐 同 武富 志穂 係長		
傍聴者	4人		

1 議題

(1) 令和7年度 重点事業等について①

～宇美町こども教育総合支援センターのワンストップ機能の向上～

まず、今後の宇美町の教育について、こどもみらい課から、こども家庭センター機能の向上について説明を行いました。

次に、折居教育長から学びの多様化学校の設立について、最後に、学校教育課から①教育相談室の移設、②適応指導教室の「教育支援センター」への名称変更について説明を行いました。

その後、総合教育会議の構成員である町長と教育委員が意見交換を行いました。会議における各構成員からの主な意見は次のとおりです。

(委 員)

ユネスコの報告によると、日本の子どもの幸福感は38か国中、37位。この感覚を学校も受け止める必要がある。日本の大人でさえ幸福度を感じない。この重さを実感し事業を進める必要がある。多様化学校の趣旨は良く理解できた。自尊感情が日本の課題だ。それを作り出すために、学びの多様化学校を創ろうとしているし、それを学校に還元することが基本で、子ども、保護者、学校が求めているものを支えていくのがこの場だと思う。

(委 員)

今の学校の制度を変えないと主体的な生徒は育たない。学校が楽しくない子どもが、ここで通えるようになって元々の学校に戻っていけない。今ある小中学校を底上げしなければならない。子ども達の実践等をもっと増やせる学校を、それぞれの学校でつくっていかなければならない。町全体、教職員全体として学びの多様化学校を創るとともに、子どもに対してどう接していくかを共通意識として考えることが課題だ。

(委 員)

児童生徒も大人も安心感を実感できる空間づくりは大賛成だ。保護者の悩みもここで受け止められるのではと思って、教育長の説明を聴いた。学校に行けない子ども達の状況は単純ではない。私たちの想像に及ばない事が色々と絡んでいるのだらうと想像する。アンケートはどなたを対象に実施したのか。

(教育長)

6月の段階でほとんど学校に行けていない子ども達のご家庭に発送した。

(町 長)

様々な理由で学校に行けていない。そういったものを今回の学校で少しでも受け止めることが出来ればという皆さんの意見もあるが、子どもに加え、保護者の負担を軽減し、一緒に学び、サポート出来たらと考えている。

(委 員)

スポーツ選手は夢や目標に沿って自分を鍛えていく側面がある。以前県の教育センターで適応指導教室の研究をしてる時に、学校に復帰できた中学生と復帰できなかった中学生を調査した。復帰できた子ども達に共通してるのは、夢や目標があった。親も励まし、目標や夢を持たせる歩みがオーソドックスだ。

臨床心理士は、カウンセリングと夢や目標を持たせるコーチング的なことを徹底していく。そこまで見越して子ども達を育てると相乗効果でいい効果が生まれる。

将来何を頑張りたいか、そのために今何をしなければいけないか、常に子ども達に刺激を与える。目標ができた段階で、学校に行かなければいけないとか、勉強を始めようという動きが起こる。そのような構想も決まってるから、いいシステムが出来上がっている。今それを学校ができない状況にあるから、何とかしてそれを生み出していかないと、学力も伸びない。そして町民も育たないという悪循環になるので、勉強はできないけれども、ボランティアをしよう等という動きを期待する。宇美町独自の伝統文化に裏付けされたインパクトのあるものにすると、関係者のモチベーションが上がると思う。

(町 長)

学びの多様化学校で完結するのではなく、他の8校と刺激し合って学んで、そして、高めることが必要だと思っている。

こども家庭センターについてはどうか。今年の4月に開設したが。

(委 員)

施設の細部にもこだわって整備されている。有効に活用できるように町民にアピールしていった方がいい。アクセスしやすいように。

(町 長)

何事も広報、SNS で定期的に施設があることを知らせていくことが大切だと考えている。簡単に保護者や子どもが相談を LINE やメール等で送信できる仕組みを作ってもらえればと思う。

(委 員)

知ってもらうことがどこでも課題。例えば地域や町の行政の学習会で時間をかけて強くアピールする。入学式や P T A の行事で説明していく。一人で抱え込まなくて良いこと、P T A も町もみんなで支えますと、何回かやっていけば、町みんなが知ることになる。様々なタイミングを見て、紹介し続けていく。

(町 長)

様々なタイミングをみて紹介し続けていく。多可と思われてもいいと思う。

(委 員)

メールで相談したい人も来館して相談したい人も、相談を受けるほうが言葉を選んで想像力を働かせて、受け入れる体制が必要だと思う。言葉の重みというか、相談を受ける人が、ふとしたところで、相手を傷つけるような言葉が出ること、相談する側と聞く側の受け止め方がすごく違うと感じられることが多々ある。

受ける側は想像力を働かせないといけない。受ける人は、人を相手にしていることを肝に銘じて、日々お仕事をさせていただけることも、あわせて重要だと思う。一生懸命子どものことを考えている人たちが希望を持って、相談した後帰れるような状態であることを望む。

(委 員)

教育支援センターについて、現在は小中学校 4 校に設置されているが、残りの学校に設置をする方向か。

(学校教育課長)

他の学校については現状として、不登校の数が少ない学校や、規模が小さい学校では、教育支援センターと銘打って、クラスを設置している現状はない。別室登校、いわゆる保健室登校は、どの学校でも対応はしているので、今のところ、全学校に対して設置する動きはない。

(教育長)

学校によっては不登校数が少ない学校もあるが、規模からみても、宇美小学校には必要と話している。今年、宇美東小学校にできたが、教室一つ割り振ることと、常駐する方が必要で費用が掛かる。今年は福岡県から補助をいただきながら整えていく。

(委 員)

8月10日にし〜ず・うみで、国立天文台の先生に来てもらい、お話をしていた。200人中の約3分の1が子どもだった。講演が終わって2人ぐらいの小学生が、先生に駆け寄り質問していた。その姿を見て、本物を間近で見るというか、内野艶和さんが、宇美小学校とか宇美中学校だけではなく、他の学校でも、オリンピック選手を間近に感じる体験も盛り込んでいけないか。

学校で書道の作品が飾ってあったが、みんな同じだった。画一化されてるんだなと思った。だから、本物って何かということ、学びの多様化学校でアプローチができれば。

(教育長)

内野艶和さんは、子ども達にぜひ出会ってほしい素敵な大人。今後、宇美町の子どもと関わっていただき、夢や志を持って将来を歩んでくれる、そんな出会いをしっかりとつくっていききたい。

(委 員)

本物の人・ものとの出会いを準備していくのが教育。一つのものとの出会い、熱意がある人との出会いは、全て変えていく効果がある。学びの多様化学校についても、宇美町の伝統芸能だったり、個性や才能を持った方と出会わせ、同時に、学校でもそのような人を授業に招く。そこにはお金は要らない。その発想を生かしていくのが今の時期。

将来の職業の選択は、人との出会い。スポーツ選手に出会うことによって、自分も頑張ってみようと動きが生まれる。だから型にはまった、画一的なものではなく、画一化された社会を変えるのは人との出会いである。

地域の方とか、保護者の希望になるカウンセラーが、1時間で問題を解決するというよりも、出会いを通して、困ったらここに行こうと思う仕組みをつくっていくことが1番いい。

(教育長)

教育委員会に、学校教育課と社会教育課とこどもみらい課の3課があるというのは強みであり、このような町はない。何よりも、子どもを大切にする大人がたくさんいる町であることは、かけがえのない強みだ。すばらしい大人との出会い、そこから夢や目標を持てる、そんな教育活動ぜひしてもらいたい。

今回御意見頂いた学びの多様化学校については、今後、文部科学省や福岡県教育委員会と協議しながら、令和7年4月の開校に向けて準備を進める。明日、20日に一斉にプレスリリースを行う。

(町長)

宇美町の子どものため、しっかり予算を確保していきたい。

(議事録署名)

以上が会議の議事内容であり、確定するために次に署名する。

この議事録は、令和6年9月18日に構成員折居教育長及び吉村委員が署名の上、確定したものである。